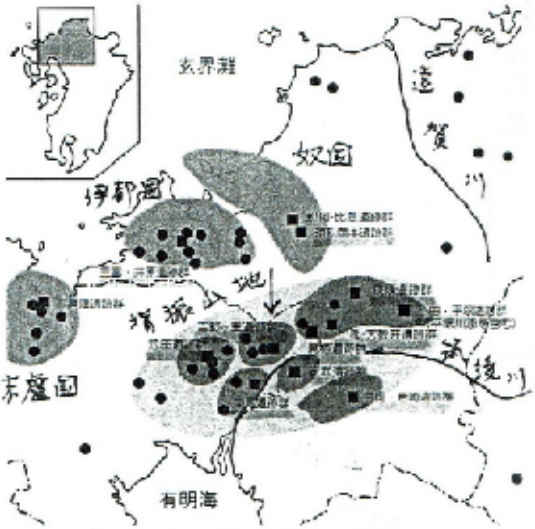
『新・邪馬台国東征論』の現場検証
2泊3日の邪馬台国ツアー

村島　秀次

1. 北部九州の遺跡群



8　弥生時代後期のクニ想定図

※既遺跡を加筆した主な遺跡。濃いアミは地域的連合、目的がさらにまとまった政治的連合を示す。

（出典）
片岡宏二『邪馬台国論争の新視点』（雄山閣.2011年）のP73の図15に一部加筆

2. 吉野ヶ里遺跡

図40・終末期の吉野ヶ里集落のつくり
弥生時代中期前半に北と南に設けられた環壕集落と防御を兼ねた線上に、大型建物とそれをかこむ北内郭が設けられた。

（出典）
七田忠昭『邪馬台国時代のクニの姿　吉野ヶ里遺跡』（新泉社、2017年）のP59の図40に一部加筆。

新・邪馬台国東遷論

村島秀次

（出典）
『古代文化を考える』第71号（東アジアの古代文化を考える会、2017年）のP1～7。

発表で使用する論旨は

枠内のみです。

はじめに

『魏志倭人伝』、正式には『三国志魏書倭人伝』（以下『倭人伝』と記す）は、三世紀の日本の姿を記録した貴重な同時代史料である。日本には正史である『日本書紀』（以下『書紀』と記す）があるが、八世紀になってから編纂されたもので、その内容には潤色や偏向が多い。

肝心な邪馬台国や卑弥呼についても、『書紀』には言及がない上に、卑弥呼＝神功皇后に比定するため実際の紀年を繰り上げ、神功皇后紀に『倭人伝』の一部を引用している。

1

両者の時代は相違しており、邪馬台国を記録から隠匿しようとしていることは明らかだ。

三世紀という時代は、実際には崇神・垂仁天皇の時代であり、筆者はかつて前著『もうひとつの古代史』において、『書紀』の記述内容や考古学的知見などから判断し、崇神・垂仁天皇が九州から畿内大和へ東遷して、ヤマト王権となり、これが邪馬台国の東遷であるという仮説を呈示した。[1]

本稿の目的は、『倭人伝』を使って、邪馬台国東遷論を別の角度から論じることにある。『倭人伝』には、邪馬台

②

国の東遷が記録され、その東遷時期も明記されていると考えているからである。

邪馬台国に関する先行研究については数多くあるが、東洋史の渡辺義浩氏の著書『魏志倭人伝の謎を解く』などに良くまとまっている。[2] 近年の研究によれば、『倭人伝』の里程記事は当時の中国人の世界観を前提に書かれており、恣意的で正確なものではないという説が有力である。つまり、中国の都である洛陽の東西各五千里が皇帝が直接治める地域で、その東端には帯方郡が設置されており、さらに一万二千余里が東海（四海）で、その東端に邪馬台国が位置すると考えている。したがって、帯方郡から邪馬台国までの距離である一万二千余里やその後の方位・里程も実測値ではなく、さらには水行、陸行という表現を加えることで遠隔性を示している。そして、洛陽から西側に同距離に位置するのが大月氏国で、両国とも「親魏○王」という称号を有しているのである。

③

そこで、畿内説や九州説のいずれもが、前提とする方位や里程の一部を修正しなければ成立しないことになる。

本稿では、方位・里程記事に依存することなく、『倭人伝』全体の記述内容と考古学的成果などを総合的に判断しながら、邪馬台国の実像に迫ってみたい。

一、東遷の記録

西暦二三九年（景初三）に、卑弥呼は曹魏に初めて使者を出す。時の皇帝・曹芳は遣使を喜び卑弥呼を親魏倭王とする詔書を下したというのが、次の有名な一文である。

〔史料1〕

景初二（二三）年六月、倭女王、遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝献。太守劉夏、遣吏将送詣京都。其年十二月、詔書報倭女王曰、制詔親魏倭王卑弥呼。

（新漢字を使用、以下同様）

④

大夫・難升米一行は、帯方郡からさらに曹魏の都・洛陽に行き、皇帝に謁見する。内藤湖南は、地名・人名・官名の綿密な考証により邪馬台国畿内説を主張したが、人名・官名については素晴しい実績を残した。湖南は、難升米を垂仁天皇の臣下である田道間守に比定すると共に、邪馬台国の四人の官のうち、伊支馬を垂仁天皇（活目入彦）、弥馬獲支を崇神天皇（御間城入彦）のそれぞれ御名代に比定した。邪馬台国の官名は、従属する国々の官名と違って官名らしくなく、個人名と考えて問題ない。さらに、イリ彦という尊称はこの時代に多いが、外部から大和へ来た者という意味であると筆者は考えている。

この三者の比定が正しければ、『書紀』に垂仁天皇が田道間守を常世国に遣わして、「非時の香菓」（橘）を求めさせたという記述の本当の意味が分かることになる。つまり、実際には遠く洛陽まで使者として派遣したのであり、『書紀』は中国への朝貢の事実を隠して脚色したということになる。

そして、注目すべきは次の記事である。

〔史料2〕

其八年、太守王頎到官。倭女王卑弥呼、与狗奴国男王卑弥弓呼素不和。遣倭載斯・烏越等詣郡、説相攻撃状。遣塞曹掾史張政等、因齎詔書・黄憧、拝仮難升米為檄告喩之。

二四七年(正始八)、卑弥呼は、新たに帯方郡太守となった王頎に対して、邪馬台国が以前より男王国狗奴国と交戦状態にあることを使者に報告させ、軍事支援を要請したと見られるが、王頎は塞曹掾史の張政等を邪馬台国に派遣して、皇帝の詔書と黄憧を大夫・難升米(田道間守)に与え告喩したという。重要な事は、曹魏に対して卑弥呼が軍事支援を要請し、帯方郡がそれに答えているということであり、したがって、この邪馬台国と狗奴国の戦争は、連合国がその周辺にあって服属しない小国と戦うレベルのものではなく、倭国を二分するような大国同士が決戦を挑むという戦いである可能性が高いことである。理由は不明であるが、卑弥呼もこの戦争期間中に死んでいる。

狗奴国と戦う邪馬台国軍の先頭には、曹魏軍を意味する黄色い軍旗が立つのである。一方の狗奴国が、三国の一つである孫呉と連携している可能性も考えられるが、それは孫呉側の記録がないために不明である。いずれにしても、倭国における邪馬台国と狗奴国の戦争に、宗主国である曹魏が介入しているという事実が重要ではないであろうか。

⑤

従来、狗奴国の比定として、畿内説であれば熊野か、毛野などの東国、九州説であれば熊襲か、肥後菊池郡などが考えられてきたが、その程度の規模の国であろうか。

筆者は、狗奴国こそが畿内大和の大国に比定でき、九州の邪馬台国と交戦していた可能性が高いと考えている。『倭人伝』によれば、狗奴国は女王国の南と読み取れるが、五世紀に書かれた『後漢書』では、女王国より東、海を渡ること千余里にして拘(狗)奴国があると記述されており、やはり方位・里程については混乱している。『倭人伝』の記述を風俗など全体的に通読する限り、曹魏の軍事支援を受ける邪馬台国が九州で、畿内の大国である狗奴国と交戦する構図であると解釈できる。つまり、二世紀後半から三世紀前半にかけて、畿内大和から九州までを統一する政権は、まだ誕生していなかったと見るのが穏当である。

その後、戦争のどの段階であるのか史料からは不明であるが、台与は張政らの帰国に当って送使を出した。その際、送使に貢ぎ物を持たせているが、その多さからすれば、戦争は邪馬台国側に有利に転開したと推察できる。

二、邪馬台国の都

現在、邪馬台国の所在地については、畿内大和説が有力であるとされている。その主な論拠は、巻向型古墳・巻向遺跡・庄内式土器の三点であるが、いずれにも問題がある。

まず、巻向型古墳であるが、畿内と九州の古墳のいずれ

かが古いにせよ、古墳は墓地であって集落ではない。つまり都ではないということになる。次に、巻向遺跡の範囲がどれだけ広いにせよ、大規模集落の遺構はいまだに検出されていない。日本各地の土器が出土しているが、巻向に住んでいたという痕跡がない。したがって、やはり都ではないことになる。さらに、庄内式土器は最初に庄内で発見されたので畿内の地名がついているが、量的には畿内より九州で多く出土している。地質や地層の違う土地の土器の比較では、型式論のみに頼らざるを得ないが、本当に九州より畿内のものが古いかについては、更なる検証が必要である。

⑥

巻向遺跡に大規模集落の遺構が検出されない限り、邪馬台国の都に比定するのは無理がある。巻向の土地は低地で居住地には向いていない。むしろ、土器や桃の種など祭祀用具の出土や、大規模建物が三輪山に向き東西軸で並んでいることから判断すると、三輪山祭祀に関係が深いと考えるのが妥当ではないだろうか。

それでは、『倭人伝』には邪馬台国の都はどのように記述されているのか。

〔史料3〕

（卑弥呼）自為王以来、少有見者。以婢千人自侍、唯有男子一人給飲食、伝辞出入。居処宮室、楼観・城柵厳設、常有人持兵守衛。

⑦

卑弥呼が王となって以来、その姿を見た者は少なく、婢千人を侍らせ、ただ一人の男子だけが飲食を給仕し、言葉を伝えるために宮室に出入りしているという。そして、卑弥呼の住む宮殿は、見張り櫓と城柵を厳しく設け、常に人々がいて武器を持って守っている。

この表現に合致する遺跡は、現在までの所、畿内や九州の中で吉野ヶ里しかない。[3]

吉野ヶ里丘陵では、弥生時代の前期初頭（前五世紀）から集落が作られ始め、最終的には後期（一～二世紀）になると、環壕集落は、それまでの前期から中期までの環壕集落や北側の墳丘墓を取り囲む環壕（外環壕）が掘削され、南北約一キロ、東西〇・六キロ、広さ四〇ヘクタール超の大規模環壕集落へと発展する。そして、後期後半から終末期（二～三世紀前半）にかけて、その内部にさまざまな施設が作られることになる。

後期後半（二世紀）には、環壕内に環壕（内環壕）に囲まれた二つの区域である「南内郭」と「北内郭」が出来る。この二つの特別な区域は、内壕を掘った土を壕の外側に盛り上げて土塁を築き、その上に柵を並べて「城柵」としている。これは、防衛と結界の二つの役割を持っていると考えられている。つまり外部から内部を簡単に見れない目隠しの効果があるということである。

⑧

「南内郭」は、南北一四〇メートル、東西九〇メートル、面積一・一ヘクタールで、中央の空白地をはさんで南北軸を中心に左右対称となっており、竪穴住居跡が五〇基前後

確認されている。吉野ヶ里の有力者の居住地と考えられており、物見櫓である「楼観」は四基設置されている。邪馬台国の「官」などの住居ではないだろうか。

一方、「北内郭」は墳丘墓に南面しており、祭祀用土器が出土していることからも、祭祀空間と考えられている。内部には、大小の掘立柱建物群と少数の竪穴住居があるなど、明らかに「南内郭」と性格が異なる。

⑨

その中で最大の建物跡は、一二メートル四方（三間×三間）の重層建物で、「北内郭」の中央南寄りにある。このほか、特記すべきは一間×二間で建物の南に一間の露台がつく高床住居が一棟あることである。大型建物の南北中軸線は、墳丘墓と祭壇と考えられる南側の盛土遺構の中心を結ぶ線上に合っている。この「北内郭」こそが、卑弥呼の「宮室」ではないかと筆者は考えている。吉野ヶ里遺跡は、『倭人伝』の記述にほぼ合致していると言わざるを得ないのである。

さらに、『倭人伝』には都の重要な機能についての記述がある。

⑩

〔史料4〕

収租賦、有邸閣。国国有市、交易有無、使大倭監之。

租と賦という税収を収納するために、倉庫（邸閣）があり、国々には物の有無を交易して、大倭という官にこれを監督させているという。実は、吉野ヶ里には、この邸閣と考えられる倉庫群の遺構も存在する。「南内郭」の西方に大倉庫群があり、その分布範囲と棟数の多さなどから、集落全体あるいは吉野ヶ里集落を頂点とした地域社会全体の物資を集積したものと考えられている。そして、倉庫以外の機能を持った重層の総柱建物跡も存在し、中国域郭の市を管理する市楼のような機能を持っていたとも想定されるが、市楼と断定するには現段階では早計である。

以上、後期の吉野ヶ里集落では内郭の環壕各所に突出部をつくり出し、その内側に「楼観（物見櫓）」が設けられており、こうした環壕をもつ集落跡が、佐賀平野を中心に筑後川流域に分布することが重要である。吉野ヶ里の「北内郭」では、壕の陸橋部分を左右にずらして、その間を木塀で囲む中国の甕城のような閉鎖的な鍵形構造となっている。

「北内郭」の最重要部分が集落の北側に存在し南面していること、「南内郭」などその他の施設が南北軸にあることや環壕の構造に中国の影響が見られることから、吉野ヶ里は曹魏の冊封下にあったと考えられることが注目される。

三、卑弥呼の墓

前節で見た通り、吉野ヶ里遺跡の遺構は『倭人伝』が描く邪馬台国の都の姿を彷彿とさせるが、吉野ヶ里が今だに邪馬台国の都であると比定されない理由のひとつに、墳丘墓の状況がある。

墳丘墓は、一般の墓地群とは隔たった丘陵である「北内

郭」の北側に位置するが、南北四〇メートル、東西三〇メートル、高さ推定四・五メートルの規模で、中期前半（前二世紀）から築造されており、十四基の甕棺墓から細型銅剣などの副葬品が出土している。墳丘墓は有力者の墓と考えて間違いないが、中期後半（前一世紀）になると新らたな埋葬がなくなる。つまり、卑弥呼の時代の墓は吉野ヶ里に作られなくなるということである。

(11)

七田忠昭氏はその理由を、中期後半以降は首長の墓を自身の出身地である集落の墓地に家族とともに葬られるという埋葬法に変化したと考えており、既に集落群の中からクニの首長を共立する仕組みが出来上ったとしている。それでは、共立された卑弥呼自身の墓は何処に作られたのであろうか、卑弥呼の出身地とは何処なのであろうか。

それには、卑弥呼の宗女・台与の名前が参考になると筆者は考えている。

〔史料5〕

名曰卑弥呼。事鬼道、能惑衆。年已長大、無夫婿、有男弟佐治国。

卑弥呼は、ヒメミコの略であり、巫女であると共に氏族の姫であり、実際の政治は男王が行なっていたと考えられる。彼女の役割は、巫女で神がかりとなって御告（ミノリ）をつげる存在であり、その御告によって男王が政治を行なう体制ではないだろうか。卑弥呼に「死」という用語を使っていることからも、身分は実はそれほど高くないことが判る。

(12)

その宗女の名・台与から、豊の国との関係が推測され、豊の国にある宇佐神宮は託宣の神として古くから有力な存在であった。奈良時代の東大寺建立や道鏡事件にも関与している神である。

宇佐の神は八幡神であるとされ、応神天皇とその母・神功皇后を主祭神とされているが、本殿の中央に祀られているのは「比売大神」という聞きなれない女神である。日本では、巫女が神自身となって祀られる側に変わる事例は多く、これが卑弥呼その人である可能性は高い。まして、邪馬台国や卑弥呼の存在を隠している『書紀』が、神功皇后が卑弥呼であるかの様な記述をしていることも興味をそそる。また、「比売大神」は、邪馬台国のお膝下である高良大社においても「豊比咩命」として祀られている。

(13)

宇佐神宮の起源は、神奈備山である御許山（ミトヤマ）に宇佐族の祖先神を祀るものであったと考えられるが、いつの頃からか八幡神が祭神であるという風に変化している。そして和銅五年（七一二）に鷹居社が、霊亀二年（七一六）に小山田社に遷座して社殿が作られ、最終的に神亀二年（七二五）に現在の社殿の地・亀山に宇佐神宮が造営されている。『書紀』の公表された七二〇年の五年後のことであり、新しい宇佐神宮の造営が『書紀』の影響下にあったことは疑いの余地がない。

〔史料6〕

卑弥呼以死、大作冢。径百余歩、徇葬者奴婢百余人。

(14)

宇佐神宮の社殿は亀山の上に立っているが、その亀山は自然の地山であるものの、その表層は近くの菱形池を掘った土で盛土をしているという伝承がある。ここが卑弥呼の墓の候補地であるが、自然の地山を利用して盛土をしたもので、「冢」の表現に合致していると考えられる。

墳上に埴輪や、葺石のある箸墓古墳が、卑弥呼の「冢」であるはずはない。「冢」とは、単に棺の上に盛土をしたものだろう。

おわりに

本稿では、邪馬台国の都や、卑弥呼の墓について比定を試みたが、文献史料などの制約から仮説に留まるもので、決定的な論証は出来ていない。

また、邪馬台国の東遷についても、それを確固なものとする証拠も現地点ではない。しかし、弥生時代に始まった九州の銅剣・銅鏡の副葬文化が、古墳時代に畿内大和に移転した理由を、最も良く説明できる仮説が、この邪馬台国東遷説である。邪馬台国の所在地論争がいまだに決着しないのも、邪馬台国が当初は九州にあり、その後畿内大和へ移転したことが原因であるかも知れない。

(15)

吉野ヶ里遺跡が、邪馬台国の都に比定されない最も大きな理由が、吉野ヶ里が弥生終末期や古墳時代になると、その規模を大きく縮少させることにある。しかし、そのことこそが、邪馬台国が畿内大和へ東遷した結果ではないだろうか。

註

(1) 拙稿「崇神天皇＝九州東遷論」(『歴史研究』六二〇号、二〇一四年)、のちに拙著『もうひとつの古代史』(歴研、二〇一五年)に収録。

(2) 渡辺義浩著『魏志倭人伝の謎を解く』(中公新書、二〇一二年)、仁藤敦史「邪馬台国論争の現状と課題」(『歴史評論』七六九号、二〇一四年)など。

(3) 最新版である七田忠昭著『邪馬台国時代のクニの都 吉野ヶ里遺跡』(新泉社、二〇一七年)を参考。

以上